

天声人語

人類史を1日にたとえれば戦争が始まったのは23時58分58秒から。それ以前はずっと戦争などなかつた。全人類が本気になりさえすれば、戦争は必ず絶滅できる——▼そう訴えて101歳まで走り続けたジャーナリストむのたけじ（本名・武野武治）さんが亡くなつた。戦争の愚や人生の妙を縦横に論じ、味わい深い箴言を残した▼「終点にはなるだけゆつくり遅く着く。それが人生の旅」「死ぬ時そこが生涯のてっぺん」。1日長く生きれば1日何か感じられる。老いをくよくよ嘆かず、人生を楽しもうと呼びかけた▼終戦を迎えた日、自身の戦争責任をとりたいと朝日新聞社を退社した。反骨のジャーナリストと慕われたが、「反骨はジャーナリズムの基本性質だ」と原点を見失いがちな後輩たちを戒めた▼戦中の新聞社であからさまな検閲や弾圧など見なかつた、危ういのは報道側の自主規制だと指摘した。「権力と問題を起こすまいと自分たちの原稿に自分たちで検閲を加える。検閲よりはるかに有害だった」。彼の残した言葉の良薬は、昨今とりわけ口に苦い。お前は萎縮しないのかと筆者も胸に手を当てる▼「ボロを旗として」「定本雪と足と」「希望は絶望のど真ん中に」。著作を貫く一徹さは特筆に値する。沸き立つときも沈むときも集団に流されやすい日本社会で、揺れのないその言葉は何より頼もしかつた。ふるさと秋田で30年筆をふるった新聞「たいまつ」の名そのままで、戦争絶滅の願いに全身を燃やし続けた。

2016・8・22